

令和 6 年 5 月 16 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13545

研究課題名（和文）幼児期の自閉スペクトラム症における遊びの特徴の解明

研究課題名（英文）Play Characteristics in Autism Spectrum Disorders in Early Childhood

研究代表者

藤原 あや（Fujiwara, Aya）

福岡教育大学・障害学生支援センター・講師

研究者番号：10882417

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自閉スペクトラム症（以下、ASD）児が楽しいと感じる遊びや参加しやすい遊びの特徴、具体的な遊びを明らかにすることを目的とした。ASD者の保護者を対象とした調査の結果、幼児期においてASD児が好み、楽しいと感じる遊びは、運動遊び、感覚遊び、受容遊び、構成遊びであり、苦手な遊びは運動遊びやルール遊び、集団遊び、役割遊びであることがわかった。これらの結果から、運動遊びや感覚遊び等を設定することで、ASD児が自ら選択して遊ぶことができる環境となると考えられた。また、役割遊びなどASD児の参加が難しい遊びにおいては、参加し易くするための工夫や必要なサポートを行う必要もあると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において幼児期の自閉スペクトラム症（以下、ASD）児が好む遊びや楽しんでいると考えられる遊びとして、運動遊び、感覚遊び、受容遊び、構成遊びであることがわかり、これらの結果は、幼児期のASD児が楽しむことのできる遊びの環境作りに役立つと考えられた。また、苦手な遊びとして挙がっていた運動遊びやルール遊び、集団遊び、役割遊びなどにおいては、参加し易くなる工夫や参加に必要なサポートが必要であると考えられ、これらは幼児期のASD児の支援において有用な視点となると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the characteristics of play that children with autism spectrum disorder (ASD) find enjoyable and easy to participate in, as well as specific types of play. The results of a survey of parents of ASD individuals revealed that in early childhood, the types of play that ASD children prefer and find enjoyable are motor play, sensory play, receptive play, and structured play, while the types of play they find weak are motor play, rules play, group play, and role play. These results suggest that setting up motor play, sensory play, and other types of play would provide an environment in which children with ASD can select and play by themselves. In addition, it was considered necessary to devise ways to make it easier for children with ASD to participate in role play and other types of play in which it is difficult for them to participate, and to provide them with the necessary support.

研究分野：特別支援保育

キーワード：自閉スペクトラム症 幼児期 遊び

1. 研究開始当初の背景

ままごとやかくれんぼなど乳幼児期における自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な活動である。遊びは、子どもの言語や運動スキルの発達を支えるだけでなく、社会生活に関するスキルや行動などを体験できる環境を提供する（Moore & Russ, 2006）。それでは、遊びに困難がある自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder; 以下、ASD）児にとって、遊びはどのような活動だろうか。ASD 児は、定型発達児や知的障害、聴覚障害、言語障害がある子どもたちと比べて、他児との遊びや簡単な集団ゲームに参加したり、簡単なゲームのルールに従ったりすることが少ないことが報告されている（Holmes & Willoughby, 2005）。

また、ASD 児は創造性や想像性、心の理論の弱さなどから、ごっこ遊びのスキルが限定的であると考えられている（Barton & Wolery, 2008）。このように ASD 児の遊びの困難さが指摘され、ASD 児を対象とした遊び支援に関する研究（Nelson. et. al, 2017）や、ASD における困難さにアプローチするための遊びの検討が行われてきている。しかし、これらの研究で参加できるようになった遊びが、ASD 児にとって楽しい遊びであるとは限らず、ASD 児にはどのような遊びがよく見られるか、どのような遊びを楽しむか、どのような遊びに参加しやすいかという視点からの検討も必要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ASD 児がどのような遊びを楽しみ、どのような活動を遊びと捉えているかを調査し、ASD 児が楽しいと感じる遊びや参加しやすい遊びの特徴、具体的な遊びを明らかにすることであった。また、それらを踏まえた遊びの環境作りや支援について検討した。

そのため本研究では、ASD 児者の保護者を対象に、家庭や保育場面において、ASD 児がよくする遊び、参加しにくい遊びなどに関する調査を行い、ASD 児が好む遊びや参加しやすい遊びの特徴および具体的な遊びを整理した。また、それらの結果を踏まえて、ASD 児の家庭や保育場面における遊びの環境作りや支援について検討した。

3. 研究の方法

(1) 対象者

対象者は、A 障害者施設（以下、A 施設）または B 障害者施設（以下、B 施設）を利用する青年期または成人期の ASD 者の保護者 22 名であり、うち有効回答数は 16 名、回答率は 72.7% であった。A 施設、B 施設とも自閉スペクトラム症や知的障害などの障害者を対象に生活介護や共同生活援助を行う施設であった。

(2) 調査期間

調査期間は、20XX 年 8 月から 10 月であった。

(3) 調査方法

配票調査法を実施した。配布した調査票に保護者が自ら記入し、後日、各施設に提出された調査票を回収する方法を用いた。

(4) 調査項目

本調査は、ASD 児が好む遊びや楽しむ遊びを明らかにするため、幼児期の ASD 児が好む遊びや幼児期に見られる具体的な遊びについての楽しさの程度を把握する調査とした。本調査は、幼児期の子どもの遊びについて問うものであり、ASD 者の保護者が、幼児期の子どもについて振り返り回答した。主な調査項目は、①子どもの現在の年齢および障害の状況、②子どもが幼児期に利用していた施設、③子どもが幼児期に好んだ遊びと苦手だった遊び、④20 個の遊びにおける子どもの楽しさの程度、⑤遊び相手による子どもの楽しさの程度、⑥幼児期における遊びの指導、⑦現在の子どもの好む遊びや余暇活動、についてであった。

調査項目④20 個の遊びにおける子どもの楽しさの程度において対象とした遊びは、大学生による評価に基づき選定した。勅使（1999）を参考に選定した 73 個の遊びのリストから、大学生が幼児期に経験したことがある遊びや知っている遊びにチェックをした。また、大学生は、リストにある遊び以外で幼児期に行っていた遊びがある場合、リストの備考欄にその遊びの名前を記入した。大学生によりチェックされた遊びと記入された遊びを、運動遊びや役割遊び、構成遊びなど 9 種類に分類し、遊びの種類が偏らないよう各種の遊びから 2~3 個の遊びを選び、合計 20 個の遊びを調査の対象とした。なお、それぞれの遊びの楽しさの程度は 4 尺度で評価し、尺度は「楽しそうだった」、「普通だった（楽しいとも楽しくないとも感じていない様子）」、「楽しくなさそうだった」、「参加したことがない」であった。

(5) 分析方法

すべての質問項目への回答について単純集計を行った。また、項目によっては全体に占める割合を算出した。さらに、遊びのカテゴリーや記述内容に応じた分類を行った項目もあった。

(6) 研究倫理

本研究は、福岡教育大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。また、対象者である保護者には書面により調査の目的を説明し、研究協力の同意を得て実施した。

4. 研究成果

(1) ASD 児が好む遊び

本研究の結果から、幼児期においてASD児は、運動遊び、感覚遊び、受容遊び、構成遊びに分類される遊びを好むと考えられた。運動遊びでは、滑り台やぶらんこ、トランポリンなどの遊びが挙げられており、ASD児は、大型遊具を使って身体を動かす遊びを好む傾向があると考えられた。一方で苦手だった遊びとしても運動遊びに分類される遊びが最も多く、中でも水遊びが苦手だったという回答が多かった。また、好みの遊びにはなかった縄跳びが、苦手だった遊びとして挙がっていた。このことから、運動遊びの中でも、使用する道具や素材によってはASD児が苦手な場合もあり、特に水遊びは子どもの好みに差があるため、遊びとして実施する際には、事前の確認や顔に水がかからないようにするといった遊び方への配慮が必要であると考えられた。

(2) ASD 児が楽しむ遊び

調査した20個の遊びをBuhler (1966)、Rubin (2001)、勅使 (1999) を参考に分類し、遊びの分類ごとの楽しさの程度をFig. 1に示した。ASD児が楽しむ遊びとしては、受容遊びや運動遊び、構成遊び、歌遊びが考えられた。楽しさの評価の対象となった20個の遊びの中に、感覚遊びが含まれていなかったことを考慮すると、ASD児が好む遊びとほぼ一致する結果となっていた。中でも「楽しそうだった」という評価が最も多かったのが、受容遊びのシャボン玉であり、シャボン玉は多くのASD児にとって楽しいと感じる遊びである可能性が考えられた。

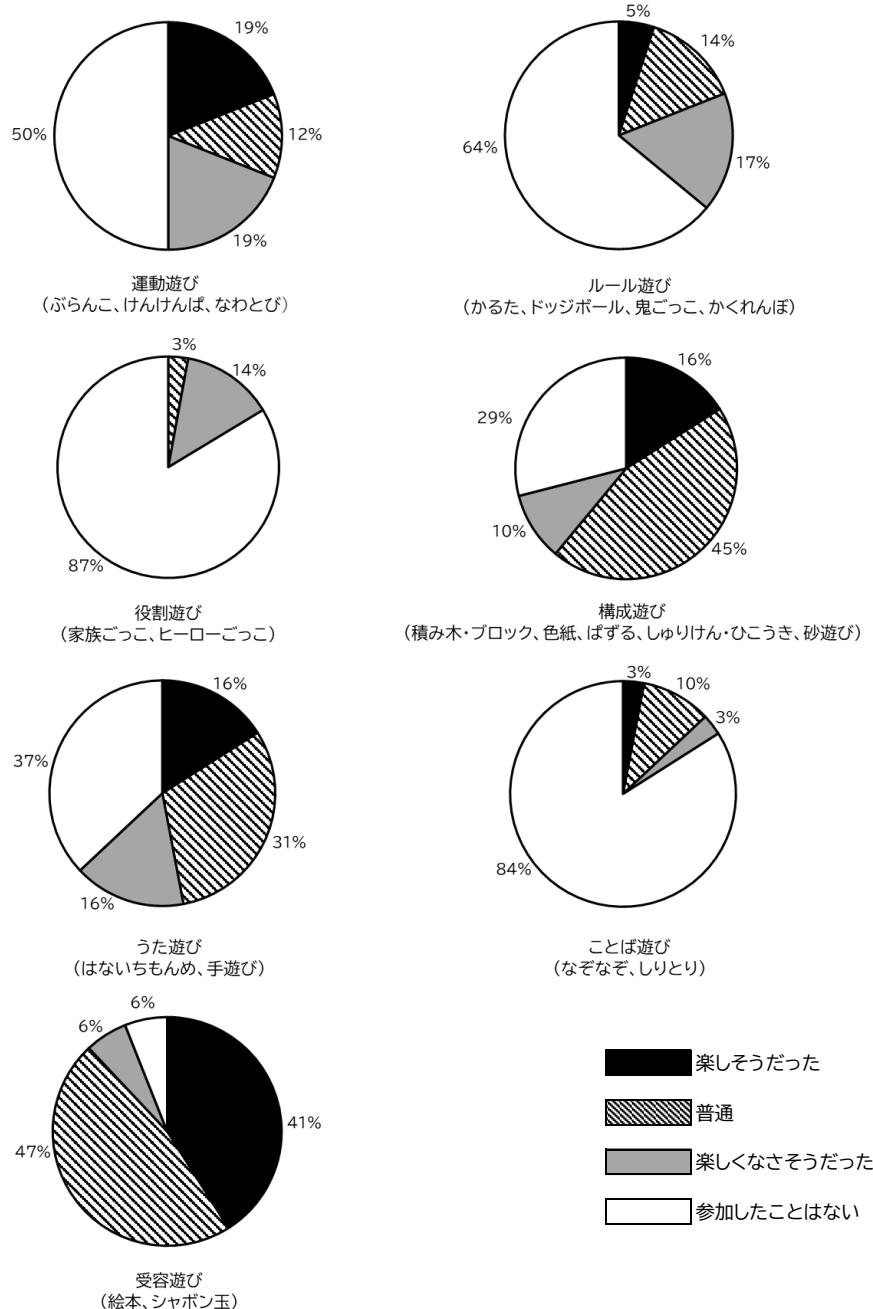


Fig.1 遊びの分類ごとに見た楽しさの程度の割合

(3) 遊びの環境作りや支援

ASD 児の好みや楽しいと感じる遊びの結果から、遊び場に運動遊びや感覚遊び、受容遊び、構成遊びを設定することで、ASD 児が自ら選択して遊ぶことができる環境となると考えられた。

また、使用する道具や遊び方には、ASD 児それぞれの好みがあるため、さまざまな道具や遊び方を試し、好きな遊びを探していく必要があるだろう。

さらに、ASD の特性により参加が難しいと考えられる役割遊びやルール遊びについても、ASD 児が参加しやすいように遊びを工夫することや、参加のために必要なサポートを行うことで、ASD 児の遊びへの参加につながる可能性がある。幼児期における ASD 児の遊びの幅を広げ、その経験を豊かにするためには、環境の設定だけでなく適切な指導も必要であると考えられた。

<引用文献>

- ① Barton, E. E., & Wolery, M. (2008) Teaching pretend play to children with disabilities: A review of the literature. *Topics in Early Childhood Special Education*, 28, 109-125.
- ② Buhler, K. (1966) *The mental development of the child.* (S. Harada, Trans: new edition). Kyodo Shuppan. (Original work published 1975).
- ③ Holmes, E. & Willoughby, T. (2005) Play behaviour of children with autism spectrum disorders, *Journal of Intellectual & Developmental Disability*, 30(3), 156-164.
- ④ Moore, M. & Russ, S. W. (2006) Pretend play as a resource for children: Implications for pediatricians and health professionals. *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*, 27, 237-248.
- ⑤ Nelson, C., Paul, K., Johnston, S. S., & Kidder, J. E. (2017) Use of a creative dance Intervention package to increase social engagement and play complexity of young children with autism spectrum disorder. *Education and Training in Autism and Developmental Disabilities*, 52(2), 170-185.
- ⑥ Rubin, K. H. (2001) *The Play Observation Scale (POS).* Center for Children, Relationships, and Culture: University of Maryland.
- ⑦ 勅使千鶴 (1999) *子どもの発達とあそびの指導.* ひとなる書房, 日本.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 真鍋健・藤原あや・丹野祐介・名取幸恵・菅原宏樹・園山繁樹
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における「遊びの指導」の今（4） 学童期段階のASD児に遊び環境を設定することの意義と具体的な方法
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木銀河・藤原あや・岡野由実・山森一希・鶴井孝大・竹田，一則
2. 発表標題 障害学生が受講するオンライン授業における大学教員の評価 ～授業形式や合理的配慮、障害学生の評価との関連～
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------